

5 調査の成果

【古墳の平面形について】

発掘調査を行う前の調査地には、棚田状の耕作地を造るために、石を積み上げて造った擁壁がありました。そして、この擁壁を造る際に、墳裾など古墳の一部が埋め立てられたことが分かりました。また、測量図には前方部2段目の斜面と思しき地形が残されています。しかし、これについても、後世の改変を受けています。

墳裾のラインは、各調査区の平面および土層の堆積状況より判断できます。これを図面に落とし、そこに直角をなす線を引きます。その線が、古墳の長軸方向すなわち被葬者が他者からみられたい（古墳の向き）となるのです。その向きは東南東。この長軸方向を基準に、古墳は造られたのです。

【古墳の造り方について】

（古墳を造るときのように）

＊＊盛土のこと＊＊

調査区の南壁を観察すると、古墳を造るために盛られた土（墳丘盛土）の重なりが分かります。長塚古墳では①明るく黄色味が強く、礫を多分に含んだ土②黒ボクのような、比較的ふんわりとした土を交互に重ねています。このようすは、過去3回の発掘調査でも確認されています。

＊＊葺石の有無＊＊

池田古墳や、茶すり山古墳のように、古墳の表面を石で飾った様子（葺石）はありません。墳裾に基底となる石を据えた痕跡も認められないことから、もともと葺石が備わっていなかった可能性が出てきました。

＊＊周濠の有無＊＊

墳裾よりも西方では、墳丘の基盤層直下に地山が広がっています。この地山が濠のように落ちこむような地形で、なおかつそこに埴輪などが堆積していれば、これが周濠であると判断できるのですが、このような状況は認められないため、墳丘には周濠が備わらない可能性がきわめて高いと考えられます。

【出土した物について】

今回の調査で出土したものは次のとおり。いずれも、古墳から流れ出したり宅地を造るときなどの、埋没過程において紛れ込んだものです。

（長塚古墳にかかわるもの）

円筒形埴輪…長塚古墳に立てられていたもの。いずれも破片です。

（長塚古墳が造られる前のもの）

土師器甕…5世紀前半代に使用されたもの。盛土に混じっているものもあります。

また、周辺に集落があったことをうかがい知ることができます。

（長塚古墳での葬儀の後の時代のもの）

須恵器杯蓋…7世紀後半代に使用されたもの。古墳が埋没するときに紛れ込んだとみられます。生焼けであることから、岡田窯跡との関連を想起させます。

土師器高杯…上記におなじ。7世紀代の集落の存在をうかがわせる資料です。